

埋蔵文化財調査センター
ニュースレター

特集 海水魚骨

石狩湾の海岸から直線距離で約15km南に位置する構内の遺跡では、海水魚の骨が発見されています。焼けた状態で遺構に残されていたことによって、他の動物骨とともに、確認できたと考えられます（遺跡で動物骨が残される理由については、ニュースレター第12号「遺跡出土の動物骨」特集をご覧ください）。

構内遺跡では、出土動物骨の同定が数多くおこなわれています。特に魚類では、擦文文化でサケの利用が活発となることとともに、続縄文文化、擦文文化でなぜか海水魚の焼骨が少量みられると指摘されています（江田真毅ほか「考古学からみた北大キャンパスの5,000年」88頁 2019年刊行）。確認された海水魚の種類、遺構での残り方を検討すると、利用後の残渣として魚骨が火床に捨てられた様子、骨角器としての利用が推測できます。

本特集では、構内遺跡で発見された海水魚骨および、その発見遺構を集成して、紹介します。



- ▲ 海水魚骨が発見された屋外炉址（続縄文末期：約6世紀の粘土層で発見）
K39遺跡北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟地点の調査では、標高約10.5mの基本層序16層の地層面で、屋外炉址4基が確認された。そのうちの1基（上の写真：第105号炉址と呼称）では、炉址に堆積していた土壌を採取し、水洗選別する調査の結果、エイ類の尾棘（ビキョク）1点が、サケ科魚類の椎骨とともに発見された。尾棘には毒があることが知られている。
アケエイの尾棘写真「ニューワイド 学研図鑑 魚」株式会社学習研究社 2008年刊行から引用

海水魚骨が発見された地点



海水魚骨が発見された炭化物マウンド(下表の1-d)の遺構(縄文文化:約9世紀)



海水魚骨が発見された竪穴住居址カマド(下表の1-b)の平面形写真(縄文文化:約9世紀)

▲恵通祭地点で焼けた海水魚骨が発見された遺構



海水魚骨が確認された竈・植物遺存体収集地点(下表の3)の発見された地層面(縄文文化前半:約1世紀)

▲ゲストハウス地点で焼けた海水魚骨が発見された遺構

番号	地名	種別	出土遺構	遺構数(区)	種・部位	発見番号	備考
1	恵通祭 炭化物埋没地点	縄文中期	炭・高土堆積層(3)	1	ニシン科魚類(マイワシ) 骨	K30111(2)遺構(3) 1808	北海道大学
		縄文中期	竪穴住居址(3) カマド	1	ニシン科魚類(マイワシ) 骨	K30111(2)遺構(3) 1808	北海道大学
		縄文中期	土壇(3) 1	2	ニシン科魚類(マイワシ) 骨	K30111(2)遺構(3) 1808	北海道大学
		縄文中期	炭化物マウンド(3)	1	ニシン科魚類(マイワシ) 骨等、フカサマシ科魚類骨等	K30111(2)遺構(3) 1808	北海道大学
2	恵通祭 土高土壇埋没地点	縄文前期	炉址(3)	2	ニシン骨等、ニシン尾骨	K30111(2)遺構(3) 2001	札幌市教育委員会
		縄文前期	竈土堆積中間所(3)	1	ニシン骨等	K30111(2)遺構(3) 2001	札幌市教育委員会
		縄文中期	竪穴住居址(3) カマド	2	ニシン骨等ほか	K30111(2)遺構(3) 2001	札幌市教育委員会
		縄文中期	竪穴住居址(3) 内	1	ニシン骨等	K30111(2)遺構(3) 2001	札幌市教育委員会
		縄文中期	竪穴住居址(3) 内(2) 高土堆積中間所	1	ニシン骨等	K30111(2)遺構(3) 2001	札幌市教育委員会
		縄文中期	炉址(3)	4	ニシン骨等、骨等	K30111(2)遺構(3) 2001	札幌市教育委員会
		縄文中期	竈土堆積中間所(3)	2	ニシン骨等	K30111(2)遺構(3) 2001	札幌市教育委員会
		縄文中期	炭化物堆積中間所(3)	1	ニシン骨等	K30111(2)遺構(3) 2001	札幌市教育委員会
		縄文後期	炉址(3)	1	天イ目魚科類、ニシン骨等	K30111(2)遺構(3) 2001	札幌市教育委員会
		縄文後期	炉址(3)	2	ニシン骨等	K30111(2)遺構(3) 2001	札幌市教育委員会
3	恵通祭 ゲストハウス地点	縄文前期中	カマド(竈)・植物遺存体収集地点	1	ニシン科魚類(マイワシ) 骨	北大構内の遺構(4) 1936	北海道大学
4	恵通祭 北方生物圏フィールド科学センター 植物資源管理棟地点	縄文後期	炉址(3)	1	魚類(マイワシ) 尾骨	北大構内の遺構(4) 2002	北海道大学縄文文化財調査センター

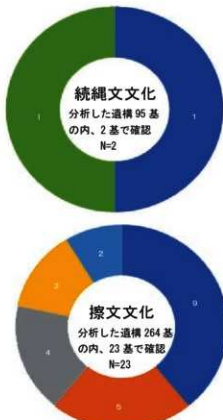
914P (3)(1)(2)(3)、914 (3)(2)、914 (3)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)、914 (3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)(11)(12)(13)(14)(15)(16)(17)(18)(19)(20)(21)(22)(23)(24)(25)(26)(27)(28)(29)(30)(31)(32)(33)(34)(35)(36)(37)(38)(39)(40)(41)(42)(43)(44)(45)(46)(47)(48)(49)(50)(51)(52)(53)(54)(55)(56)(57)(58)(59)(60)(61)(62)(63)(64)(65)(66)(67)(68)(69)(70)(71)(72)(73)(74)(75)(76)(77)(78)(79)(80)(81)(82)(83)(84)(85)(86)(87)(88)(89)(90)(91)(92)(93)(94)(95)(96)(97)(98)(99)(100)

■ 海水魚骨が発見された遺構

構内遺跡で確認された遺構では、動物骨が残されていることが多く、破片となった動物骨の同定が実施されています。動物骨の同定が実施された遺構の総数359基の内、縄文文化で2基、擦文文化で23基の遺構で海水魚類の骨（エイ類、ニシン科魚類もしくはニシン）が確認されています（右図）。

縄文文化では炉址からエイ類の尾棘1点が発見されている一方、擦文文化では炉址、堅穴住居址のカマド・炉址で、ニシン科魚類（もしくはニシン）、エイ類の尾棘1点がみられます（2頁表を参照）。

炉址、堅穴住居址のカマドでは、火床の直上に堆積した土壌で海水魚類の焼骨の集積が著しいことから、調理などに利用した後、海水魚類の骨を含む残渣が火処に廃棄されていた可能性があります。



海水魚骨が確認された遺構の種類と数量 ▶

動物骨の同定が実施された遺構を集計し、それらの中で海水魚骨が発見された遺構の数、種類を円グラフで示した。



■ 尾棘製の骨角器

縄文文化の本州の遺跡では、エイ類の尾棘製の骨角器が発見されています。

群馬県不動穴洞穴（下写真の左）では、縄文文化草創期から中期の土器片が確認された地層で、尾棘製のヤス状刺突具（下写真の右）が見つかっています。ヤス状骨角器の基部では両側からえぐられた加工痕があり、柄に取り付けられる際の痕跡と考えられます。



▲ 群馬県不動穴洞穴の様子（左写真）、骨角器（右写真）

骨角器はヤス状刺突具（長さ7cm、最大幅6mm、厚さ2.5mmの大きさ）である。不動穴洞穴団体研究会、2022、不動穴洞穴発掘調査報告書から引用。

■ ニシンの特性

ニシン科魚類のニシンは、北海道の日本海側（石狩湾など）などでみられる海水魚です。体長は、約12年で約36cmになります。

普段は、海水の上層部から水深約100mの範囲までを群れて回遊している一方、産卵期である冬季から春季にかけては、海の沿岸で海藻に産卵します。ニシン卵の受精の際の様子は、「群来」と呼ばれています。

遅くとも18世紀にはカズノコ、干物などの加工・利用があったことが知られています。



▲ ニシンが群れて回遊の様子

ニシンは、魚体の側面および腹面が銀色で、背鰭の周辺が黒色である。佐藤長明ほか、2022、北の磯魚生態図鑑 北海道大学出版会から引用

